実践女子大学 実践女子大学短期大学部

NO.21
2023年7月

下田歌子記念女性総合研究所 News letter

左上下：企画展示「下田歌子と結婚」（於：渋谷キャンパス 香雪記念資料館 下田歌子記念室〈5/15～6/2〉）、
右上下：ロビー展示「下田歌子とその時代」（於：ドナルド・キーン・センター柏崎〈6/1～6/30〉）を開催しました。

Contents

02 Column 01
下田歌子記念女性総合研究所　開所10周年によせて
実践女子大学・実践女子大学短期大学部 学長　難波 雅紀

03 Column 02
下田歌子記念女性総合研究所　開所10周年によせて
実践女子学園中学校高等学校 校長　湯浅 茂雄

04 Column 03
カンボジアにおける家族・世帯と女性のライフコースの変化
人間社会学部人間社会学科 教授　高橋 美和

05 Column 04
客員研究員に就任して
客員研究員　奥島 尚樹

06 第7回 実践の現代史・ナラティヴ（語り）
部谷 紀久子氏インタビュー

08 2023年度 実践女子大学
下田歌子記念女性総合研究所研究員
グループ研究紹介

Column 01

下田歌子記念女性総合研究所 開所10周年によせて

実践女子大学・実践女子大学短期大学部 学長　難波 雅紀

下田歌子記念女性総合研究所（略称「下田研」）の創設10周年、心からお祝い申し上げます。スタート時は「下田歌子研究所」として発足し、学祖下田歌子の事績について、学園史に未記載のもの、記載があっても詳細が不明なものを、資料の収集と整理によって整備、補完することが役割でした。そして現在、下田研は、下田歌子の精神を継承し、女性に関する学際的、総合的な研究をつうじて、女性がよりいきいきと活躍できる社会の構築を目指しています。大きく発展してきた下田研を支えてこられた歴代所長、研究員のご尽力に、深い感謝と敬意を表したいと思います。

ところで、世界の日本語学習者の約８割は、アジア地域に住む人々だと言われています。その背景には、高度経済成長を経た日本との交流拡大や各国での教育課程への日本語科目の導入政策があります。加えて、近年、諸外国において、わけても東南アジアや南アジアでは、マンガやアニメ、食文化、儀礼や風習などの伝統文化を含め、広範囲に及ぶ日本文化への興味が若年層を中心に高まっています。それが日本語への関心、ひいては日本語学習を始める大きな動機の一つとなっています。諸外国の生活においては、日本語能力や日本文化の素養を身につけていることがアドヴァンテージにさえなっています。

本学ではグローバル戦略として、外国からの正規留学生の受け入れを掲げています。特に東南アジアからの留学生を念頭に置いていまが、留学生は、本学が有する学部学科において、日本語や日本のポップカルチャー、食文化、伝統文化などを正規に学ぶことができます。そして、帰国後は、本学で得た知識・技能を活かし、母国での持続可能な社会の発展に寄与することができます。本学には、そうした人材育成の受け皿になることで国際社会に貢献できる道があります。

このグローバル戦略を実り豊かにするためには、学祖下田歌子の人物や思想、業績を諸外国に向けて発信し、下田をまず知ってもらうことが必要です。下田研の研究年報第９号には、研究所の兼務研究員として本学英文学科教授も係わった、コンコーディア大学歴史学部名誉教授 Linda L. Johnson による論文“Meiji Women's Educators as Public Intellectuals: Shimoda Utako and Tsuda Umeko”の日本語訳、「明治の「発信する知識人」としての女子教育家―下田歌子と津田梅子」が掲載されています。この日本語訳は、国外における下田歌子の評価を下田研が取り上げ、紹介した最初のものだと思いますが、こうした例を増やしていくことが重要なわけです。そこで、手始めに、下田歌子記念女性総合研究所研究叢書の記念すべき第１巻『下田歌子と近代日本――良妻賢母論と女子教育の創出』の英訳を手がけてみてはどうでしょうか。あるいは、下田研が出版した下田歌子新編著作、『婦人常識訓』、『女子のつとめ』、『女子の心得』、『結婚要訣』、『良妻と賢母』の５巻を、英訳と現代日本語訳の形で出版し、学祖下田歌子について、国内外へ発信し、広く知ってもらうのも良いかも知れません。

勝手なことばかり書いてしまいましたが、現在・未来において、女性がよりいきいきと活躍できる社会の実現に向けて、下田歌子記念女性総合研究所がさらなる発展を遂げることを期待したいと思います。

Column 02

下田歌子記念女性総合研究所 開所10周年によせて

実践女子学園中学校高等学校 校長　湯浅 茂雄

現在の下田歌子記念女性総合研究所の母体となった下田歌子研究所は、当初、井原徹前理事長の肝いりで、学園附置の形で2014年4月に創設されました。私は初代所長に任命され、2017年度まで所長を務めておりました。また、2016年度には大学附置研究所となり、2018年度から広井多鶴子新所長の下、研究の拡大と充実をめざして現在の名称に改称されました。そして2022年度から現在の高橋桂子所長体制に受け継がれています。

2014年に創設された下田歌子研究所には前身があります。2011年7月20日に発足したプロジェクト研究下田歌子研究所（大関啓子所長）です。プロジェクト研究所は、他のプロジェクト研究所と同様、物理的な研究設備を持つわけではなく、下田歌子研究に関わる有志を研究員として構成され、学園から予算をもらって運営されていました。研究員は渋谷・日野の両キャンパスの専門分野の異なる教職員6名に加え、下田先生の生誕地である岐阜県恵那市岩村からお二人の協力を得て、8名の研究員でスタートしました。合同での研究会や講演会の開催、資料調査のほか、岩村では「歌子さんの集い」と称して研究交流会を開催し、地元の多くの皆様に参加していただき、貴重な情報交換の機会も得ました。また、「うた子だより」という機関誌も3号（2013年11月9日）まで刊行しています。このような多彩な活動の実績が評価され、専任の研究員と事務職、研究設備を備える恒常的な研究所として2014年4月に創設されたのです。

また、プロジェクト研究下田歌子研究所の発足にも経緯があります。私は2007年度から実践女子大学・同短期大学の学長に就任しました（2012年度まで）が、その当初から共通教育の抜本的な見直しを課題としました。共通教育の中で自校教育のプログラムを創設し、そこで学祖下田歌子の教育理念や業績をしっかり学生に伝えたいと考えていました。全学的な検討、意思決定の結果を得るまでに2年間を要しましたが、2009年4月から、現在の「実践入門セミナー」の形となり、自校教育もスタートしました。その中で、私の学長在任中は「下田歌子に学ぶ」と題する講義として、全学の学生に学祖の教育理念を伝えてきたつもりです。原点に戻って、下田先生の教育理念を再確認・再評価するという機運が醸成される中で有志が集まり、プロジェクト研究下田歌子研究所の発足に繋がったと考えています。

私の手元には2014年度、発足当初の下田歌子研究所事業計画の案文が残っています。その前文には「研究所の事業は、下田歌子の目指したものの、現代及び未来おける実現をめざす動輪と、その基礎となる下田歌子の事績研究・学園の歴史研究など、資料収集を含む歴史的な調査・研究の動輪の二つからなり、この二つの動輪により活発な活動を行い、その成果を学園内外に積極的に発信する。」とあり、具体的な事業計画として11の柱が立てられています。その最初の二つの柱が前文に沿うように「1.男女共同参画社会の実現と女性のキャリア支援に関する調査・研究・提言」「2.下田歌子の事績研究･学園の歴史研究とその資料収集とアーカイブ化」となっています。2014年度の研究所発足当初から、下田歌子研究所は下田歌子の歴史的研究、事績研究ばかりでなく、現在の下田歌子記念女性総合研究所に繋がる研究（女性のキャリア形成や社会進出に関する研究）も視野に置いていたことをご確認いただければと存じます。

常設の下田歌子研究所を想定できなかった時代を知る私にとって、開所10周年を迎える下田歌子記念女性総合研究所の現在の姿に深い感銘を覚えています。益々の研究の拡大と充実、それらの社会への発信を願っています。

Column 03

カンボジアにおける家族・世帯と女性のライフコースの変化

人間社会学部人間社会学科 教授　高橋 美和

筆者の専攻分野は文化人類学、現在の研究対象地はカンボジアである。2022年度、在外研修で現地に約1年間滞在し、ある農村の22年ぶりの再調査が実現した。少子高齢化を迎えているカンボジアでの、この家族・世帯調査で得た知見を中心に述べたい。

カンボジアの多様な世帯類型のうち、統計上最多は核家族世帯である。しかし、一子は結婚後も親元に残留することが多く、この一子が親の老後のケアを主として担うことが期待される。その一子は娘であることが多い。つまり、妻方居住が夫方居住よりも多い。また、結婚後親と同居しない娘たちも、実家の近隣に世帯を構える傾向が、これまでは強かった。

王族等を除くと、ある祖先を起点とした一系的な子孫の集団（出自集団）が存在せず、「○○一族」という捉え方がカンボジアには無い。「親戚」は、自己から見た血族・姻族両方の認識できる範囲の全体であって、父方・母方／夫方・妻方の双方に広がる。

冒頭に述べた同一農村の再調査の結果、家族・世帯の状況には、以前から持続している部分と変化した部分とが見いだせた。

前述の妻方居住の優勢は持続している。この22年で村の人口は増加したが、増加分の多くは、婚姻によって村外から来た男性たちであった。また、傍系親族（未婚キョウダイ、オジ、オバ、甥、姪等）を含む多様な拡大家族世帯が存在することも22年前と変わらない。世帯構成が非常に柔軟であることがカンボジアの家族の特徴の一つである。

農村調査に参加してくれた王立プノンペン大生たち

大きな変化と言えるのが、就労のため夫婦そろって村外（外国のケースもある）に居住する人々の増加だ。その結果、祖父母と孫のみの世帯、つまり一世代不在の「隔世代世帯」が出現した。祖父母が元気なら親代わりを務められるが、そうでなければ孫たちが逆に祖父母のケアをする側になる。

高齢者の実数・人口比率も増加した。保健医療の向上により平均寿命が伸びたことは喜ばしい。しかし、高齢者介護を支援する公的制度や施設が皆無のカンボジアでは、介護は家族に任され、特に女性の負担が大きい。調査村では、介護をする女性は50歳代が中心で、実家の近くに住んでいるケースが多いため、老親のケアは「娘たち」が協力し合うことができる。しかし、急速に進む少子化と、村外流出する若者の増加とによって、近い将来、破綻する危険性がある。

進学のために都会に行く若い女子の増加も著しい。大卒の若者の多くは村に戻らない。「娘は結婚後も実家の近くに」という従来の傾向からすると、驚くべき変化である。実際、全国各地から学生が集まるトップ校、王立プノンペン大学でも、女子学生の数が男子を上回っており、2022年度高校修了統一試験の合格者も、女子が男子を大きく上回った。中等課程までの女子就学率は今も男子より低いが、高等教育では逆転現象が起きているのだ。

農業や自営業が主流だったカンボジアでは、女性が結婚・出産を機に仕事を辞めるというライフコースがそもそも一般的ではなかったが、雇用労働に就く女性が多い首都プノンペンでも、同様である。大学教員の家庭など、高学歴の共働き夫婦がいる核家族世帯では、ジェンダー平等が相当程度達成されているようだ。朝・昼・夕の車での子どもの送迎（半日制の学校が多いため）を含め、様々な家事・育児を夫婦でできるかぎり助け合うことで多忙な毎日を乗り切っている。柔軟な家庭運営については、カンボジア人から学べることが大いにありそうである。

Column 04

客員研究員に就任して

客員研究員　奥島 尚樹

実践女子学園（学園、大学、短大、中高）で80周年の年に採用となり令和5年3月31日に定年で退職した元職員です。私は国立図書館短期大学を卒業し司書としての資格を取得、大学図書館の洋書係として実践に就職いたしました。当時は「実践女子学園八十年史」を書かれた山口典子先生がご存命で、時折下田先生のお話を伺ったりしたことを憶えております。

大学図書館勤務時代は下田先生に関しては特に仕事として対応したことはなく、山口先生から時折カメラ（フィルムです）や情報検索（手作業です）に関して相談を受けたり、当時はまだ珍しかったコンピューター（ワープロなど）に関してのお話をしたりしたことがあるぐらいでした。様々お話した中で、海外教育視察に関しては色々と調べて欲しいという御依頼を受けたことはありますが、残念ながら当時の情報源の状態では芳しい結果を出すことはできませんでした。

その後実践の中の様々な部署で仕事をし、平成27年より下田歌子研究所（現:下田歌子記念女性総合研究所）の事務部長として1年半ほど仕事をしましたが、その期間の間に数十年間で溜まった下田先生に関する疑問に関し、現在使用できる様々な方法で調査したところ良い結果が出ましたので、それらに関しては「下田歌子研究所　ニューズレター」などで報告をしております。また、120周年の時は香雪記念資料館に勤務しておりましたので、120周年の記念展示を担当いたしました。

役職定年後の再雇用で最後の2年は大学図書館で参事として実践女子学園の学校に関することの外部機関（公文書館等）での調査と結果の処理、および下田資料の電子化や散逸していたデータをまとめる作業をおこなっておりました。

基本的には下田資料を原典としつつそれに関連する「ヒト・モノ・コト」を調査することで、下田先生の周りにふくらみを設け色々な方がそこから下田先生に迫るきっかけを提供することができたらと考え、これまでに集めた資料やネットの情報等から見つけ出したことを残していくことを目標に客員研究員としての活動を希望いたしました。

下田資料の中には速記で記録された下田先生の講義や講演録が残されていますが、解読できる方がもう存在せずそのままになっているとのことで、可能かどうかは未知数ですが、現在のAI技術（画像認識）を用いて解読ができないかを考えています。

『下田歌子研究所「ニューズレター」』
No. 5　(2015)「下田歌子先生世界一周教育視察（1)」
No. 6　(2016)「下田歌子先生世界一周教育視察（2)」
No. 7　(2016)「明治・大正・昭和の著作で知る、下田歌子先生のバイタリティー」
No. 8　(2017)「平尾大社と守芳院（佐久市)」
No. 10　(2018)「下田先生に関連する石碑等（1）瓜生岩子と下田歌子」
No. 12　(2019)「下田先生に関連する石碑等（2）平尾守芳公・下田歌子先生顕彰碑公園」
『実践被服生活環境科会「歌ごろも」』
第29号(2020)「下田先生と結婚式について」
第30号(2021)「帝国婦人協会発行「日本婦人」について」
第31号(2022)「女子農芸学校設立趣旨」「女子農芸学校施設目論見書」
『下田歌子記念女性総合研究所「年報」』
第 9 号(2023)「下田歌子文書（三）―翻刻―［女子農芸学校設立趣旨］女子農芸学校施設目論見書」

第7回

実践の現代史 ナラティヴ

戦後の実践の歩みを知るために、本研究所では卒業生や教職員に聞き取りを行っております。題して「実践の現代史・ナラティヴ（語り）」。7回目は、42年にわたり、大学事務部長、総務部長、企画室部長、学園顧問などを歴任された部谷紀久子さんです。インタビュー形式により、当時の学園の様子や学生の雰囲気、職場でのエピソード、そして、現在の私達へのメッセージなどを伺いました。（所長　髙橋桂子）

interview
部谷 紀久子氏

部谷 紀久子氏 プロフィール

- 1960（昭和35）年3月 実践女子学園高等学校卒業
- 1962（昭和37）年3月 実践女子短期大学卒業
- 1962（昭和37）年4月～2003（平成15）年3月 短大助手（3年間）を経て大学・短大事務部、大学事務部長、総務部長、企画室部長などを歴任
- 2003（平成13）年4月～2007（平成19）年3月 学園顧問

▶なぜ実践女子学園に入学されたのですか。

私は昭和29年4月に実践女子学園中学校に入学しました。三歳違いの姉が実践に在学していたので、私も実践に入学するのが当たり前だと思っていました。姉の入学時に、母は私達娘をどのような学校に入学させるか、知人や近所の方に聞いていたようですが、中でも実践は宮中に仕えた下田歌子先生が創設した学校ということを知り、皇室崇拝でもあることから実践に決めたようです。

短大国文科への入学は、結果的には消去法で決めました。高校時代、勉強は苦手で、この先4年間勉強を続けることは辛いと思い、2年間の短大を選びました。担任の先生からは短大に進むのであれば、英文科に、母からは家政科にと勧められていました。国文科を選んだのは、私はアルファベットやカタカナが苦手で、好きな洋裁も短大で勉強するほどでもなく、強いて言えば漢字には抵抗がなかったので、結果、国文科に決めました。今の若い方に比べると、主体性がなく、誠に恥ずかしい限りです。

▶印象に残っている学生時代のエピソードは何ですか。

短大に入学したのが昭和35年4月でした。その1年前の高校3年生の4月10日、今の上皇様のご成婚のパレードがありました。当時の東宮仮御所（現在の常陸宮邸）の正門は、実践の正門近くにありましたので、パレードの終盤、高校3年生が並んで旗を振ってお迎えしました。清楚で美しいお二人を目の当たりにした感激は、忘れることのない思い出です。

短大2年間の授業は、大学の課程をコンパクトにまとめたような感がありました。短大の専任の先生は3人しかおらず、ほとんどの科目は大学の専任の先生方が担当されていたので、おかげで大学国文へ進んだ友人とも共通話題で花が咲きました。

当時の国文の先生方は高名な方ばかりで、授業は緊張しましたね。それでも1年生の時に受けた学長の山岸徳平先生の『源氏物語』の講義は、記憶に残る楽しくも不思議？な授業でした。行間の説明を丁寧に熱く楽しく語られるので、1年間かけても「桐壺の巻」は終わりませんでした。大学の授業はこのようにすすめられるものかと妙に納得したものです。

▶職員として入職した理由は何でしょうか。

短大を卒業後、叔父の縁故で三井物産の入社試験を受ける予定でいたところ、試験前日に短大国文科研究室から「助手にならないか」と打診がありました。私の母は、卒業後は花嫁修業をして結婚するのが女の幸せと考えていたので、就職は賛成しませんでしたが、私は短大の研究室の雰囲気がとても好きだったので、ぜひ就職したいと思い母を説得しました。

その後事務局に移ったのは、助手に入って3年目に助手の任期が2年と決まり、3月で退職することになっていましたが、「大学事務局の庶務課で勤務してみないか」とお声をかけていただき、結婚するまでの足掛けのつもりでお願いしました。なんとそれが40年間も学園にお世話になるとは、思ってもみませんでしたね。

▶入職して、特に印象に残っていることはありますか。

助手時代は、まず学生全員の名前を覚えようとしました。顔は定かでなくとも苗字を言われればすぐ下の名前が出るように努めました。「〇〇さんおはよう」と声をかけるとびっくりする学生もいましたよ。お陰でその後の学生とのコミュニケーションもよく、最近まで理事をされていた故池田章子さん（元ブルドックソース社長）もそのひとりでした。

事務局に入ってからは長い年月でしたので、沢山勉強させてもらいました。中でも私にとっての一番の幸せは、その行く先々の職場で上司に恵まれたことでした。

渋谷の大学事務局時代、まず一つ目は役職、係長に就いたことです。昭和40年代の後半に大学事務局、図書館に初めて係長職がおかれました。それまで役職といえば部長、課長で、法人本部も含め全て男性でした。教学関係で初めて係長についたのは大学事務局女性4人、図書館女性3人、男性は2人でした。一般社会では、女性のキャリアが中々認められず、社会進出も一部を除いては難しかった時代です。その点実践女子大は、他の女子大に先駆けてまず女性の係長職をおき、教学関係事務職員の質の向上に務めたのだと思います。私たちも控えめながら、嬉しかったですよ。とはいえ私達の上司の考え方が素晴らしかったのでしょうね。

二つ目は、入試業務の「コンピューター」導入に関わったことです。当時は特別な広報をせずとも受験生が沢山集まりました。全て手作業でしたから採点の先生方も深夜になることも度々ありました。採点が終わると事務局の出番で、採点の見落とし、計算違い等の目検を行い、「そろばん」で集計し、順位が出ます。全て手作業でしたから、大学事務局全員と図書館や他部署の人たちが「そろばん」を手に参集しました。不満を言う人は誰もいませんでしたね。あの頃は、どの部署も日々の仕事を楽しんでしていたような気がします。一体感がありましたね。そんな時コンピューター導入の話が上がってきました。当時コンピューターは信用できないと言う先生もいらして、なかなか理解が得られず、先ずは事務関係の部分からの導入でした。コンピューターを利用して出来ることは沢山ありましたが、単に手作業をコンピューターに変えただけの、もったいない話でした。でも機械化の第一歩を踏み出せたことは、仕事の合理化を進めるうえで期待感がもてるようになりました。

三つ目は学園が創立100周年を迎えたその年の4月に、総務部長を拝命しました。今まで法人の部署に就いたことがなく、自分で定年を決めていた61歳まで5年しかなかったので戸惑いはありました。反面、学園の中でやってみたいこともあり、お引き受けすることにしました。「働き方改革」と「納得のいく人事」です。難しい課題と分かっていたものの、構想はどんどん膨らむのですが、長年蓄積されたモノを解きほぐすことは難しかったですね。この時ほど自分の覚悟の甘さ、力不足を自覚したことはありませんでしたが、理事長、常務理事の理解に救われました。

その後、飯塚幸子先生が女性で初めて学長に就任されました。小さな体から出る気概に圧倒、刺激され、数人の先生と相談し、「ホームカミングデー」を試行しました。手探りで、小規模なものだったと記憶していますが、

現在は大変充実したもので、継続しているのが何よりも嬉しいことですね。

▶どんな志を持って仕事をしてこられましたか。

まずは何事にも真摯に向き合うこと。私の信条は性善説なので人とのぶつかりは極力避けてきました。そして教学の職員として学園の規程や規約はもとより関係ある規程等に熟知することを自分に課しました。

当時は文部省（今の文部科学省）によく相談で出向くことがあり、異動してきた新人の係官に「勉強しておきます」と頭を下げられたこともありましたよ。規程、規約に基づいて仕事をすることは当たり前ですが、ともするとがんじがらめで動きが取れず、悔いを残す結果にもなりかねません。その時々によって、柔軟に対応できるすべを見つけることも必要です。これは難しいことですがとても大事なことです。

▶現在の学生、職員、後輩へのメッセージをお願いします。

若い皆さんには、「経験を積む」ことをお勧めします。「Try and error」やってみなければ分かりません。ともすると新しいことへの挑戦をおそれることがありますが、経験することによって、感動があり、反省があり、次につなぐ学びの選択肢が多くなることは事実です。

若い頃40年も仕事を続けていくとは思ってもみませんでしたが、女性として先輩の中原和子さんと一緒に初めての女性の部長に昇任し、大学事務部長、総務部部長を歴任しました。当時は、飯塚幸子学長、松田由紀子校長の時代であり、総務部長も女性という珍しい体制の中で、経験を積み重ね得たものは沢山ありました。

男女、役職にこだわるわけではありませんが、女性職員がその立場で活躍している様子を見ると、頼もしく嬉しくなる感情は隠せません。

これから益々学園が発展していくことを念じ、皆様のご活躍をお祈りしています。

聞き手：　久保貴子 専任研究員／広井多鶴子 兼務研究員／
高橋 渉 研究推進室 担当部長／
金田ひろみ 研究所事務課課長／
久住律子 研究所事務課

日　時：　2022年11月13日（日）14：00～15：45

場　所：　大学日野キャンパス 本館4階449教室

2023年度 実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所研究員

髙橋　桂子（所長・生活文化学科 教授）
久保　貴子（専任研究員・専任講師）
大川　知子（兼務研究員・生活環境学科 教授）
織田　涼子（兼務研究員・美学美術史学科 准教授）
駒谷　真美（兼務研究員・人間社会学科 教授）
佐藤　幸子（兼務研究員・食生活科学科 教授）
志渡岡理恵（兼務研究員・英文学科 教授）
須賀由紀子（兼務研究員・現代生活学科 教授）
清田　夏代（兼務研究員・大学教職センター 教授）
髙橋　美和（兼務研究員・人間社会学科 教授）
田中　正浩（兼務研究員・生活文化学科 教授）
広井多鶴子（兼務研究員・人間社会学科 教授）
深澤　晶久（兼務研究員・国文学科 教授）
村上まどか（兼務研究員・英文学科 教授）
愛甲　晴美（客員研究員・福生市郷土資料室）
奥島　尚樹（客員研究員・元実践女子学園職員）
神木まなみ（客員研究員・大正大学総合学修支援機構 DAC コアチューター）
牛腸ヒロミ（客員研究員・実践女子大学 名誉教授）
鈴木　隆一（客員研究員・実践女子学園岩村親善大使）
関　登美子（客員研究員・実践女子大学非常勤講師）
細江　容子（客員研究員・実践女子大学 名誉教授）
松田　純子（客員研究員・実践女子大学 名誉教授）
若森　慶隆（客員研究員・NPO 法人いわむら一斎塾）

（各研究員 50 音順）

グループ研究紹介

(1) 英語論文グループ
◎村上まどか・髙橋桂子・駒谷真美・松田純子

翻訳チームでは、発掘した外国語文献を和訳することによって、歌子が海外でどのように研究されているかを調査し、公開しています。昨年度は下田女総研『年報』第９号にリンダ・L・ジョンソン「明治の『発信する知識人』としての女子教育家―下田歌子と津田梅子」（香川せつ子監訳、村上・志渡岡共訳）を掲載いたしました。今年度は髙橋、駒谷、松田もメンバーに加わり、英語のみならず中国語で書かれた文献にも取り組んでいます。

(2) 下田歌子と経済グループ
◎髙橋桂子・久保貴子・奥島尚樹

世界に通じる新しい皇女教育を考えるためのヨーロッパ視察（明治 26 ～ 28 年）。この時の海外送金はどのようだったのでしょう。経営者として、本学設立のための土地の購入費・学舎建築費の手当は？などについて試行錯誤しながら進めております。下田先生と経済 money という観点は、これまでにはなされてこなかった斬新なものです。メンバーの関心に従い、自由に調査研究を進めております。

(3) 文化グループ
◎大川知子・織田涼子・佐藤幸子・牛腸ヒロミ・関登美子

５名の構成メンバーの、「衣・食・美」という専門領域の多様性を活かし、この２年ほどをかけて、下田歌子の『女子の技芸』（明治 37 年刊行）の現代語訳に取り組みます。この著作は上編・下編、計 18 分野から成り、これを一人４～５分野担当し、月に一度、互いの進捗状況を共有しながら進めています。途中経過を含めた成果は、年報等で報告予定です。

(4) 女子教育グループ
◎広井多鶴子・久保貴子・志渡岡理恵・田中正浩・清田夏代・髙橋美和

女子教育グループは、女子の中等高等教育の歴史と現状を把握するために、2023 年度は以下の３つの柱を立てて調査研究を進めています。

①信越方面調査
本学園の創立と同時期に、下田歌子が女子教育の必要性を強く訴えて設立した北越支会、新潟支会について考究する。

②イギリス女子教育
ケンブリッジ大学女子学寮の取り組みを始めとするイギリスの女子教育の現状について、歴史を踏まえながらリサーチを行う。

③女子大学に関する聞き取り調査
女子大学の今後のありかたを考えるために、首都圏の女子大学の学長・副学長などに聞き取り調査を行う。

(5) 本学学生のキャリア形成グループ
◎髙橋桂子・深澤晶久・須賀由紀子・広井多鶴子・牛腸ヒロミ

主にメンバーのゼミ生を対象にインタビュー調査を実施・共有しています。これまでの仕事内容、典型的な１日のスケジュールをお話頂いた後、「社会人」として経験を積む中で、これが「仕事だ」「社会人だ」と思った出来事、成長を実感した瞬間、失敗への対処や心がけていることなどを披露頂きます。最後に、母校の学びとの関連で役に立っていること、「あったらいいな」こんな授業、イベント、支援、在学生へのエールで締めてもらっています。６月上旬までに約 10 名の卒業生インタビューが終了しました。

(6) 国内外の教育･研究機関との連携グループ
◎志渡岡理恵・髙橋桂子・清田夏代

本グループは、下田歌子記念女性総合研究所が国内外の教育・研究機関と連携し、活動の幅を広げる可能性を探ることを目的としています。今年度は、他大学が国内外の機関と連携している事例を調査し、その中のいくつかに焦点を当て、担当者にインタビューを行い、連携に至った経緯・プロセス、メリット・デメリット、考慮すべき問題などについて学びます。現在、情報収集を行なっており、７月に研究会を開催してピックアップする事例について検討する予定です。

『ニューズレター』No. 21
発行：2023 年７月 28 日　編集・発行所：実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所
〒 191-8510　東京都日野市大坂上 4-1-1　電話：042-585-8945　E-mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp